九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

自己愛性からみた怒られ経験に対する認知と感情反応

板井, 咲希
九州大学大学院人間環境学府

古賀, 聡
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/2558915

出版情報：九州大学心理学研究. 21, pp.1-7, 2020-03-16. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2020, Vol.21, 1-7

自己愛性からみた怒られ経験に対する認知と感情反応

板井　咲希　九州大学大学院人間環境学府
古賀　　聡　九州大学大学院人間環境学研究院

Cognitive and emotional responses to angered experiences from the perspective of narcissism

Saki Itai（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Satoshi Koga（*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

This study investigated whether there were differences in people's degree of recognition of angered experiences as ego threats, emotional reactions to such experiences, and the mechanism of processing such experiences according to narcissistic tendencies and the narcissism four subtypes. University students (N = 155) completed a questionnaire and the results of the analysis showed that when subjected to angered experience, people with hypervigilant narcissism tend to feel anxiety, those with compound narcissism tend to feel both anger and anxiety, and those with oblivious narcissism and low levels of narcissism are less prone to anger and anxiety. In addition, it was also shown that those with compound narcissism tend to show other-responsible responses, and those with low levels of narcissism tend to show self-responsible responses. From these results, it is clear that evaluation hypersensitivity leads to high levels of anxiety and people have both evaluation sensitivity and the exaggeration are high feel anger. This perspective of narcissistic tendencies drawn from the reaction of young people to angered experiences, can help develop psychological support for adolescence.

Key Words: types of narcissism, angered experience, adolescents

Ⅰ　問題と目的

他者から叱責される経験はしばしばネガティブな感情を喚起するが，乳幼児期から老年期までの生涯を通じて避けられないものである。ところで，他者から叱責されたことに対する傷つきの度合いや生じる感情は個人によって様々である。遠藤ら（1991）は親が子どもを叱る時の叱り方について分類し，叱り方による子どもの反応の仕方の差異について検討した。また，佐藤ら（2013）は教師の叱り方によって中学生が感じる感情に差異があることを示した。これらのように，先行研究では叱責者の叱責の仕方によって叱責の受け手の感情が左右されると論じられているものが多い。しかし実際には，叱責の受け手の性格特性など，叱責の受け手の要因も大きく関わっていると考えられる。本研究ではそのような個人差が生じる一つの要素として，叱責の受け手の自己愛傾向に着目する。なお，本研究では他者から叱責される経験，つまり怒られ経験を，阿部・太田（2014）の定義に基づき「自身の行為を相手に不当と認識され，改善を求められる経験」と定義し，怒られ経験が生じている場面を怒られ場面とする。

自己愛とは，自己を価値あるものと感じようとし，それを他者にも認めてもらおうとする傾向のことであり，健康な人にもみられる自然のものである（上地・宮下，2005）。しかし，その傾向が過剰に高まるなど歪んだ形で出現することで自己愛の障害が生じる。近年，Gabbard（1989）が自己愛性パーソナリティ障害を無関心型と過敏型からなるスペクトラムとする理論を提唱したことから，自己愛を２つの下位タイプに大別する考え方が注目されている。Gabbard（1989）によると，無関心型は傲慢で攻撃的，常に注目の的であろうとし，傷つくことに鈍感で，過敏型は抑制的で内気，他者の反応，特に批判などに過度に敏感で傷つきやすいといった特徴がある。また，実証研究において自己愛の２タイプを１次元上のスペクトラムではなく２つの次元から捉え，無関心型と過敏型に加えその混合した形態からなるスペクトラムとする考え方もなされている。中山・中谷（2006）は自己愛傾向を誇大性（無関心型の特徴に相当する）と過敏性の２次元から測定できる評価過敏性―誇大性自己愛尺度を作成し，下位尺度の高低から，誇大性のみが高い誇大型，評価過敏性のみが高い過敏型，誇大性も評価過敏性も高い混合型，誇大性も評価過敏性も低い低自己愛群という４群に青年の自己愛を分類した。２次元から自己愛の下位タイプを捉えることで，より多様な自己愛の表れ方について考察できるため，本研究では中山・中谷（2006）による評価過敏性―誇大性自己愛尺度を用いて自己愛傾向について検討する。

また，青年期は自己愛傾向が高まりやすい時期と言われている（中山・中谷，2006）。この時期の自己愛傾向の高まりはDSM-5に示されている通り必ずしも自己愛

性パーソナリティ障害に繋がるものではないが（APA, 2013），不適応的な側面も存在する。例えば一般に青年期は家族以外の新たな対人関係が重要になってくる時期であるが，伊藤ら（2011）によると，過敏性の自己愛傾向が高い青年は，対人関係において自己愛的な傷つきが生じやすくなり，結果として傷つきを回避するためにふれあい恐怖心性や対人恐怖心性といった対人関係回避の傾向が高まるとされている。こうした点から，青年達の抱える対人関係上の不適応感を自己愛という視点から捉えることは，青年期心性を理解し支援するための一助とされると考えられる。そのような観点から本研究では，青年期を対象に自己愛傾向の高まりによる不適応感，とりわけ怒られ経験に対する認知と感情反応の在り方について検討する。

怒られ経験と自己愛傾向の関連として，自己愛的な傷つき，つまり自己イメージの転落の生じやすさの差異があるのではないだろうか。自己愛傾向の高い人には，極度に理想化された自己イメージ（理想自己）と過度に卑下された自己イメージ（恥ずべき自己）という２つの自己イメージが乖離して存在し，そのため個人の中の自己イメージが揺らぎやすくなっているとされる（岡野，1998）。そしてこの不安定な自己イメージが理想自己から恥ずべき自己へ転落することによって自己愛的な傷つきが生じる（岡野，1998）。

怒られ経験に対する個人差の要因として，自己愛傾向が高いほどこの自己愛的な傷つきを回避するために，怒られ経験に対して過敏になるのではないかという仮説が考えられる。また自己愛的な傷つきは怒りや恥などの感情を生起させる（岡野，2017）が，そのようなネガティブな感情を生じやすく，それらの感情を他者に対して攻撃的に表出することや，また生じることを恐れて対人関係を回避することが不適応感の原因となるのではないか。

Gabbard（1989）は臨床的知見から過敏型について他者からの批判などに過度に敏感であると述べている。また，Bushman & Baumeister（1998）は自己愛傾向の高い者が否定的な評価を自我脅威に受け取りやすい事を実験によって示した。これらの先行研究から自己愛傾向の高い人は怒られ経験などの否定的なフィードバックを受ける経験を過敏に自我脅威と捉えやすいことが推測されるが，Bushman & Baumeister（1998）の研究では自己愛の下位型に着目した検討はなされていない。そのため，本研究では中山・中谷（2006）による自己愛の４下位タイプの観点から，怒られ経験を自我脅威として認知する程度について実証的に検討することとする。

また，怒られ経験により生じる感情やその処理の仕方の個人差について，自己愛的な傷つきにより生じる感情が自己愛の下位タイプによって異なることが考えられる。市川・外山（2016）は対人恐怖心性―自己愛傾向２次元モデル尺度短縮版（TSNS-S）による自己愛５類型間（自己愛傾向のみが強い誇大特性優位型，対人恐怖心性のみが高い過敏特性優位型，両方が高い誇大―過敏特性両向型，両方が低い誇大―過敏特性両貧型，各尺度の平均値から ±0.5*SD* である中間型）で失敗経験後に生じる感情の差異について検討した。この失敗経験は因子分析の結果自分の失敗場面と他者からの指摘・叱責場面という２つに分けられ，このうち否定的フィードバックを受けた場面である他者からの指摘・叱責場面について，過敏型と両向型において恥と抑うつ・不安の得点が高いことが示された（市川・外山，2016）。また，同じく他者からの指摘・叱責場面において，誇大型は傷つくことを回避しようと敵意を生じ，過敏型は自己愛的な傷つきを生じさせた他者に対する心理的抵抗から敵意を生じると述べている（市川・外山，2016）。したがって，否定的フィードバックを受けた際，混合型は恥，抑うつ，不安を，過敏型は恥，抑うつ，不安，怒りを，誇大型は怒りを生じやすいと考えられる。市川・外山（2016）ではこれらの場面設定について，安田（2004）による羞恥感情尺度を用いているが，この尺度では“人前で叱られたり注意されたりする”など抽象的な場面設定にとどまっている。本研究では怒られ経験という限定的な状況に絞り，より具体的な場面設定を行うことで，より実際の状況に即した検討を行うことが出来ると考える。

以上より，本研究では自己愛傾向の高さとタイプによって怒られ経験の認知と感情反応，その処理の仕方に差異があるかを検討することを目的とし，以下の３つの仮説を検討する。

仮説１：誇大型・過敏型・混合型は低自己愛群より怒られ経験を自我脅威と認知しやすい。

仮説２：誇大型は他の類型より怒りの感情を生じやすく，過敏型は他の類型より恥，抑うつ，不安，怒りの感情を生じやすい。混合型は他の類型より恥，抑うつ，不安の感情を生じやすく，また低自己愛群は他の類型より否定的な感情を生じにくい。

仮説３：誇大型は他の類型より他責的な反応を，過敏型は自責的な反応を示す傾向が高い。混合型は外言においては自責的，内言においては他責的な反応を示す傾向が高い。低自己愛群は自責・無責的な反応を示す傾向が高い。

Ⅱ　方法

調査協力者および調査手続き

調査はＸ年11月に，Ａ県内の４年制大学の学生155名（男性50名，女性105名，平均年齢19.23歳，

SD=.859）を対象として大学の講義時間中に質問紙にて実施した。

質問紙の構成

1. フェイスシート

無記名で，年齢，学年，性別の回答を求め，倫理的配慮について記載した。

2. 怒られ場面（Fig. 1 参照）

「勉強をしない」「けんかをした」「忘れ物をした」「部屋の整理をしない」からなる親からよく叱られた場面（遠藤ら，1991），「授業中のおしゃべり」「お菓子の持ち込み」「提出物の不提出」「部活動中のふざけあい」からなる教師からの叱られ場面（佐藤ら，2013）から，調査協力者が身近に経験したことがある可能性が高く，また理不尽に怒られていると感じると自己愛的な傷つき以外により生じる感情が測定される恐れがあるため，少なからず怒られ手に非がある場面として一部を抜粋し，大学生向けに内容を変更した。例えば Fig.1 の「部屋の整理をしない」では，大学生になると一人暮らしを始める人が多く，自分の部屋の整理をしないことについて親から怒られることは少ないのではないかと考えた。そのため，サークルの部室など共用部屋の掃除当番を忘れたことを，自分の代わりに掃除をした人に怒られるという場面設定にした。

質問紙中ではこれらの場面設定を図版と文章にて説明した。図版は P-F スタディを参考に作成した。また，投影的側面を促進するために P-F スタディと同様に登場人物の顔のパーツを描かず作成したが，怒り手（P-F スタディにおける阻害者）と怒られ手（被阻害者）という関係性を明確にする必要があったため被阻害者を調査協力者（「あなた」）とし，また図版に阻害者のみを描き一人称視点とすることで阻害者と調査協力者が直接向き合う形にした。

そして，場面ごとに以下の 3，4，5 について尋ねた。

3. 怒られ経験に対する外言・内言

各怒られ場面について「どのように返答するか（外言）」「どのように思うか（内言）」を，それぞれ自由記述によって回答を求めた。

4. 怒られ経験に対する感情反応

小川ら（2000）による一般感情尺度から否定的感情尺度，鈴木（1998）による不安，抑うつ，怒りを表す感情語から抑うつの感情語と，怒りの感情語のうち，それぞれ因子負荷量の高いものを 3 項目ずつ用い，また自己愛的な傷つきは恥を生じる（岡野，1998）ことから「恥ずかしい」という項目を加え，計 15 項目について「1（全く感じない）」から「4（とても感じる）」までの 4 件法で尋ねた。

部屋の整理をしない

Fig.1　怒られ場面の図版の例

5. 怒られ経験の認知

各怒られ場面について，どの程度怒られたと感じたかを「1（全く感じない）」から「4（強く感じる）」までの 4 件法で尋ねた。

6. 評価過敏性―誇大性自己愛尺度（中山・中谷，2006）

自己愛に関する 18 項目について，「1（全く当てはまらない）」から「5（とても当てはまる）」までの 5 件法で尋ねた。

倫理的配慮

調査協力者に対しては，書面にて，研究の主旨とともに倫理的事項について説明を行った。調査協力は任意であり協力の有無により不利益を被ることが無いこと，回答は中断しても構わないこと，データは統計的処理を行い個人情報は保護されること，データが調査の目的以外で使用されることは無いこと，本調査への協力の有無及び回答の内容が授業の評価に影響を与えないことについて記載した。

Ⅲ　結果

1. 評価過敏性―誇大性自己愛尺度の分類

中山・中谷（2006）による因子構造を用いて回答者の自己愛を類型化した。分類に際し，誇大性，評価過敏性の下位尺度得点を標準化し，誇大性が正，評価過敏性が正の混合型 43 名，誇大性が正，評価過敏性が負の誇大型 39 名，誇大性が負，評価過敏性が正の過敏型 35 名，誇大性が負，評価過敏性が負の低自己愛群 38 名に分類した。

2. 怒られ経験に対する外言・内言のスコアリング

自由記述によって得られた回答に対して，外言・内言それぞれについて秦（2010）を参考にスコアリングを行った。スコアはアグレッションの向かう方向によって，外部に向けられる他責（E），内部に向けられる自責（I），どちらにも向けられず回避される無責（M）の3種類と，判定不能のUに分類された。アグレッションが2方向に向けられている反応については，結合スコアとして2種類の因子をスコアリングした。なお，本研究のスコアリングについては，評価の妥当性を高めるために，筆者の他に臨床心理士の有資格者2名及び臨床心理学を専攻する大学院生1名の協力を得て，協議によってスコアを決定した。

3. 怒られ経験に対する感情に関する項目群の因子分析

怒られ経験に対する感情に関する項目群について，最尤法による因子分析を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け，さらにその変化を考慮した上で2因子構造が妥当であると判断し，プロマックス回転を行った。その結果，因子負荷量が.40以下であった「11. 恥ずかしい」の項目を削除し，再度因子分析を行った。その結果，因子負荷量が.40以下であった「4. ふさぎこんだ」「5. そわそわした」「10. 無気力な」の3項目を削除し，再度因子分析を行った。その結果，2因子構造が得られた。結果はTable 1に示す。第1因子は，「どきどきした」「沈んだ」など，不安な場面において生じる感情語から構成されたため，『不安』因子と命名した。次に，第2因子は，「おこった」「むっとした」など，怒りを表す感情語の項目から構成されたため，『怒り』因子と命名した。そして，それぞれの因子についてクロンバックのα係数による信頼性分析を行った。その結果，『不安』因子はα=.90，『怒り』因子はα=.90であった。この結果から，感情尺度の因子構造は上記の2因子構造が妥当であると考えた。

Table 1
感情尺度の因子分析結果（N = 155）

第1因子　不安（α = .90）	第1因子	第2因子	共通性
(13) どきどきした	.82	-.03	.53
(15) びくびくした	.81	-.04	.55
(2) 緊張した	.76	-.08	.41
(12) 恐ろしい	.75	.00	.50
(1) うろたえた	.74	-.06	.79
(6) 動揺した	.69	.07	.73
(3) 沈んだ	.63	.05	.41
(9) 驚いた	.58	.18	.56
第2因子　怒り（α = .90）			
(7) おこった	-.01	.89	.67
(8) むっとした	-.06	.86	.62
(14) かっとした	-.08	.77	.64
因子間相関	第1因子	.23	

括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

4. 自己愛のタイプと怒られ経験の認知についての検討

評価過敏性―誇大性自己愛尺度の4分類を独立変数，怒られたと感じた程度の得点を従属変数とした一要因被験者間分散分析を行った。その結果，自己愛のタイプによる有意な差はみられなかった（F(3,145) =1.98, *n.s.*）。結果をTable 2に示す。

5. 自己愛のタイプと怒られ経験に対する感情についての検討

評価過敏性―誇大性自己愛尺度の4分類を独立変数，感情尺度の『不安』の因子，『怒り』の因子それぞれの下位尺度得点を従属変数とする一要因被験者間分散分析を行った。その結果，『不安』因子において「自己愛」における有意な主効果がみられた（F (3,144) =5.61, p < .05）。「自己愛」の主効果においてTukey法による多重比較を行った結果，「誇大型」より「混合型」「過敏型」が5%水準で『不安』因子の得点が有意に高かった。『怒り』因子においては，「自己愛」における有意な主効果がみられた（F(3,144) =8.55, p < .001）。「自己愛」の主効果においてTukey法による多重比較を行った結果，「誇大型」より「混合型」が5%水準で，「低自己愛群」より「混合型」が0.1%水準で『怒り』因子の得点が有意に高かった。また，結果をTable 2に示す。

Table 2
自己愛タイプを独立変数，認知と感情を従属変数とした一要因分散分析の結果

自己愛	混合型 (*SD*)	誇大型 (*SD*)	過敏型 (*SD*)	低自己愛群 (*SD*)	主効果
程度	26.77 *(3.90)*	25.76 *(5.03)*	27.00 *(3.07)*	28.03 *(2.95)*	1.98
怒り	1.83 *(0.56)*	1.46 *(0.40)*	1.34 *(0.33)*	1.59 *(0.46)*	8.55*** 誇，低＜混
不安	2.21 *(0.53)*	1.81 *(0.51)*	1.98 *(0.58)*	2.25 *(0.51)*	5.61** 誇＜混，過

* = p < .05, ** = p < .01, *** = p < .001

Table 3
自己愛と外言・内言に関する従属変数の分散分析結果

自己愛	混合型 (*SD*)	誇大型 (*SD*)	過敏型 (*SD*)	低自己愛群 (*SD*)	主効果
外言 I	76.53 *(24.49)*	75.27 *(19.76)*	83.00 *(15.31)*	83.95 *(16.36)*	3.30
外言 E	8.97 *(14.89)*	8.00 *(11.16)*	1.70 *(3.64)*	3.90 *(5.10)*	1.36
外言 M	14.65 *(16.62)*	16.7 *(17.05)*	15.37 *(14.80)*	12.15 *(15.66)*	.33
内言 I	52.74 *(22.31)*	60.03 *(22.54)*	70.97 *(23.15)*	60.50 *(24.37)*	3.37** 混＜低
内言 E	44.32 *(22.00)*	33.97 *(20.50)*	26.10 *(23.25)*	37.55 *(22.64)*	3.37** 低＜混
内言 M	2.97 *(6.33)*	5.90 *(8.68)*	2.97 *(10.56)*	1.95 *(4.12)*	1.24

* = $p < .05$, ** = $p < .01$, *** = $p < .001$

6. 自己愛のタイプと怒られ経験に対する外言・内言の検討

スコアについて回答者ごとに外言・内言それぞれで各反応がどの程度の頻度でみられたかを集計し，林（2007）を参考に出現率（%）を算出した。その後，評価過敏性―誇大性自己愛尺度の 4 分類を独立変数，『外言』・『内言』それぞれにおける各アグレッションの方向の出現率を従属変数とした一要因被験者間分散分析を行った。その結果，『外言における E 反応の出現率』において有意な主効果がみられた（$F(3,110)=3.30, p < .05$）。Tukey 法による多重比較を行った結果，「低自己愛群」より「混合型」が 5% 水準で E 反応の出現率が高かった。しかし，『外言における I 反応の出現率』，『外言における M 反応の出現率』においては有意な差がみられなかった（$F(3,110)=1.36$, *n.s.*；$F(3,110)=.33$, *n.s.*）。また，『内言における I 反応の出現率』『内言における E 反応の出現率』において有意な主効果がみられた（$F(3,110)=3.37$, $p < .05$；$F(3,110)=3.73, p < .05$）。『内言における I 反応の出現率』と『内言における E 反応の出現率』について，Tukey 法による多重比較を行った結果，『内言における I 反応の出現率』においては「混合型」より「低自己愛群」が 5% 水準で I 反応の出現率が高かった。『内言における E 反応の出現率』においては「低自己愛群」より「混合型」が 1% 水準で E 反応の出現率が高かった。しかし，『内言における M 反応の出現率』においては有意な差がみられなかった（$F(3,110)=1.24$, *n.s.*）。結果を Table 3 に示す。

Ⅳ　考察

1. 自己愛の下位タイプによる怒られ経験を自我脅威と認知する程度の差異

分散分析の結果から，自己愛のタイプと怒られたと感じた程度の得点に有意差は見られず，自己愛傾向の高い 3 群が低自己愛群より怒られ経験を自我脅威と認知しやすいという仮説 1 は支持されなかった。これまで実証研究において，先述した通り自己愛傾向の高い者が否定的な評価を自我脅威に受け取りやすい事（Bushman & Baumeister，1998）が示されており，本研究において有意差がみられなかったことには方法や教示の仕方に原因があるのではないかと考えらえる。本研究では「どの程度怒られたと感じたか」という教示のもとで回答を求めたため，怒られ経験を認知したかについて調査することはできたが，怒られ経験を自我脅威として認知したかについては引き出されなかったのではないかと推察される。今後は Bushman & Baumeister（1998）のように実験的手法を用いることや，自我脅威を測定するために先行研究でも扱われている（仙波，2017；藤野，2014 など）状態自尊心の概念を取り入れるなどして質問紙の精度を高めていくことが課題とされる。

2. 自己愛の下位タイプによる怒られ経験に対する感情の差異

分散分析の結果から，怒られ経験に対して生じる感情についての仮説 2 は，「過敏型」「混合型」が他の類型より不安を生じやすい点，「低自己愛群」が他の類型より怒りを生じにくい点においてのみ支持された。過敏型と混合型はどちらも評価過敏性の高い類型である。評価過敏性は「他者によって自己価値・自己評価を低められるような証拠がないことを確認することによって自己価

値，自己評価を肯定的なものとして維持しようとする」はたらき（中山・中谷，2006）であり，怒られ経験という他者からの否定的フィードバックを受ける経験によって自己評価が低められる，つまり自己愛的傷つきを生じ，その結果不安を生じると考えられる。また，混合型は評価過敏性に加えて「他者によらず，自らを肯定的に認識することで，自己価値・自己評価を肯定的に維持しようとする（中山・中谷，2006）」はたらきである誇大性も高い類型である。混合型では不安に加え怒りも生じやすいことが示されたことから，極度に理想化され肯定的に認識された自己イメージが他者によって低められることで，不安に加えて怒りをも生じるのではないかと推察される。誇大型では誇大性のみが高いため，他者からの否定的フィードバックでは自己イメージが低められず，そのため怒りや不安などの感情を生じなかったのではないかと考えられる。

3. 自己愛の下位タイプによる怒られ経験に対する感情の処理の差異

分散分析の結果から，混合型は外言・内言共に他の類型より他責的な反応を示しやすいこと，低自己愛群は内言において自責的な反応を示しやすいことが示された。このことから，仮説3は支持されなかった。しかし，本調査では怒られ経験という場面設定の影響により，どの類型においても自責的な反応が多くみられた。そのため外言における自責的な反応には有意差がみられなかったと考えられる。このことから，外言における反応にばらつきがみられるような場面設定をすることで，低自己愛群において，外言でも自責的な反応を有意に示す傾向がみられる可能性が考えられる。また，混合型について，混合型は外言において自責的，内言において他責的な反応を示すという仮説を立てていた。結果としては，混合型は怒られ経験に対して不安と怒りを生じやすいという結果が示された。藤野（2014）は，怒りの感情は怒りの制御をしにくくすること，不安の感情は怒りの表出を制限することを示しており，この結果は怒りの感情が内言における他責的な反応を促進し，しかし不安の感情によって外言における他責的な反応が抑制され自責的な反応が増えるという点において，混合型における仮説3と一致する。にもかかわらず本研究における結果が仮説と異なる結果になったのは，混合型が他の類型より怒りを生じやすいことが関係しているのではないか。つまり，他の類型では混合型より怒られ経験に対して怒りを生じにくいため，混合型より他責的な反応が少ない結果となり，結果的に混合型が他責的な反応を示しやすいという結果が示されたのではないか。

4. 総合考察

本研究の目的は自己愛傾向の高さとタイプによって怒られ経験の認知と感情反応，その処理の仕方に差異があるかを検討することであった。その結果，怒られ経験によって生じる感情反応やその処理の仕方に差異がみられることが明らかにされた。また，感情反応は評価過敏性が高い方が生じやすいことや，混合型は生じた感情を他のタイプより他責的に処理する傾向があることが示唆された。

本研究の課題として，筆者が検討することを目的としていた，怒られ経験を自我脅威と認知する程度について十分に検討出来なかったことが挙げられる。今後の更なる研究において教示の仕方などについて，細かく設定していくことで，怒られ経験を自我脅威と認知する程度の差異について検討でき，更なる青年期心性への理解が深まると考えられる。また，本研究では量的な検討を行ったため，自由記述によって得られた回答を吟味しきれなかった。したがって，今後は実験やインタビュー調査など質的な検討も行っていく必要があると考えられる。更に場面設定について，本研究では遠藤ら（1991），佐藤ら（2013）から怒られ場面を選定した。そしてこれらの場面から，大学生が日常的に経験しやすい場面と考えられる友人関係や先輩後輩関係などの場面に変更して怒られ場面図版を作成したが，今後は自由記述などで大学生が経験しやすい怒られ経験について詳しく調査した上で怒られ場面を作成することが課題である。

本研究では青年期を対象に自己愛傾向の高まりによる不適応感について検討した。本研究で得られた知見によって，同じ怒られ経験に対して，不適応的な反応を示す青年とそうでない青年の違いを考える際に，自己愛傾向という視点が示唆された。また今後，そのような青年への心理的支援の発展が見込まれると考えられる。

〈付記〉

本論文は，九州大学教育学部に著者が提出した平成30年度卒業論文を再構成したものです。本研究を進めるにあたってご指導くださった九州大学大学院人間環境学府の丸山明子氏，白濵あかね氏，岡誠貴氏に深く感謝申し上げます。また，調査にご協力くださった西南女学院大学の水貝洵子先生や，学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引 用 文 献

阿部晋吾・大田　仁（2014）．中学生の叱られ経験後の援助要請態度：自己愛傾向による差異．教育心理学研究，**62**，294-304.

American Psychiatric Association（2013）．*Diagnostic and*

Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition：*DSM-5*. *Washington, DC*：Author.

Bushman & Baumeister（1998）. *Threatened egotism narcissism, self-esteem, and, direct anddisplaced aggression*：*Does self-love or self-hate lead to violence?* Journal of Personalityand Social Psychology, **75**, 219-229.

遠藤由美・吉川佐紀子・三宮真智子（1991）. 親の叱りことばの表現に関する研究. 教育心理学研究, **39**（1）, 85-91.

藤野京子（2014）. 否定的に評価された場面における怒り表出に至るプロセスの解明について：自尊心や不安の影響を加味した分析. 犯罪心理学研究, **52**（1）, 47-58.

Glen O. Gabbard, M. D.（1989）. *Two subtypes of Narcissistic Personality Disorder*. Bulletin of the Menninger Clinic, **53**（6）:572-32.

秦　一士（2010）. P-F スタディアセスメント要領. 北大路書房.

林　勝造（2007）. P-F スタディ解説. 三京房.

市川玲子・外山美樹（2016）. 対人恐怖心性―自己愛傾向 2 次元モデル類型間の失敗経験後に生じる感情の差異：自己呈示欲求からの影響. 教育心理学研究, **64**, 228-240.

伊藤　亮・村瀬聡美・金井篤子（2011）. 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれあい恐怖心性に及ぼす影響について：自己愛的脆弱性尺度を用いた検討. パーソナリティ研究, **19**（3）, 181-190.

上地雄一郎・宮下一博（2005）. コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, **14**（1）. 80-91.

中山留美子・中谷素之（2006）. 青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討. 教育心理学研究, **54**, 188-198.

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人（2000）. 一般感情尺度の作成. 心理学研究, **71**（3）, 241-246.

岡野憲一郎（1998）. 恥と自己愛の精神分析：対人恐怖から差別論まで. 岩波学術出版.

岡野憲一郎（2017）. 自己愛と怒り. 精神分析研究, **61**（4）, 477-482.

佐藤　純・向居　暁・西井宏美・堀下智子（2013）. 中学生は教師からの叱りに対してどう認知し反応するのか. 日本教育工学論文誌, **37**（1）, 1-12.

仙波亮一（2018）. 自己愛タイプ別に見た労働者の自我脅威の知覚が対処方略に及ぼす影響. 実験社会心理学研究, **57**（2）, 105-116.

鈴木常元（1998）. 不安, 抑うつ, 怒りを表す感情語の分析. 筑波大学心理学研究, **20**, 217-223.

安田　郁（2004）. 青年期における羞恥感情に関する研究：青年期危機との関係から. 九州大学心理学研究, **5**, 247-255.